

問題

次の文章は『蜻蛉日記』の一節で、作者のもとへ夫の訪れることが途絶えていた頃の記述である。これを読み、あとの問に答えよ。(50点)

1 かくて、絶えたるほど、わが家は内裏よりまゐりまかづる道に a しもあれば、夜中あかつきと、*うちしはぶきてうち渡るも、聞かじと思へども、うちとけたる寝もねられず、*夜長う b して眠ることなければ、1 さなりと見聞くこころは、なにかは似たる。いまは 2 いかで見聞かずだにありにしがなと思ふに、「むかし 3 すきことせし人もいまはおはせずとか」など、人につきてきこえこつを聞くを、もの c しうのみおぼゆれば、日暮はわびしうのみおぼゆ。問四

5 *子どもあまたありと聞くところも、むげに絶えぬと聞く。あはれ、ましていかばかりと思ひて、4 とぶらふ。九月はかりのことなりけり。あはれなど、しげく書きて、作者

吹く風につけてもとはむ *ささがにの通ひ d し道は空に絶ゆとも

問五・感想

問五・主語

ながつき

返りごとは、こまやかに、時姫

色変はる心と見ればつけてとふ風 A もおもほゆるかな

問六・条件

とぞある。

注

*うちしはぶきて＝せきばらいをして。 *夜長うして眠ることなければ＝「秋ノ夜長シ、夜長クシテ眠ルコト無ケレバ天明ケズ」(『白氏文集』上陽白髮人)に基づく。上陽人は、十六歳で後宮に入つて以来、一度も帝にまみえることなく一生を終えた。 *子どもあまたありと聞くところ＝夫(藤原兼家)の妻、時姫を指す。作者が兼家と

チェック

問二(ii)

古典常識や古文の典型的な展開を踏まえて読む

問四

前後の文脈を踏まえて傍線部を解釈する

問五

文脈や敬語から動作主・動作の受け手を押さえる

問六

和歌の詠み手と受け手を意識し、前後の文脈や修辞知識を使って内容を把握する

結婚したとき、兼家にはすでに時姫という正妻がいた。 *ささがに^い「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛の
ふるまひかねてしるしも」(『古今和歌集』墨滅歌) による。

問一 傍線 a ～ d の文法的説明として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ(同一記号の反復使用不可)。

- | | | | | | |
|---|--------------|---|-------------|---|---------------|
| ア | サ行変格活用動詞の連用形 | イ | 形容詞の活用語尾の一部 | ウ | 過去の助動詞「き」の連体形 |
| エ | 副助詞 | カ | 格助詞「して」の一部 | ク | 接続助詞「して」の一部 |

(8点)

問二 傍線 1 について、次の (i) (ii) に答えよ。

- (i) (例) にならって品詞分解せよ。
- | | | | |
|-----|----|-----|----|
| (例) | 動詞 | 助動詞 | 名詞 |
| 絶え | たる | ほど | |

(6点)

(ii) 傍線 1 とはどのようなことを言っているのか、具体的に説明せよ。

(8点)

問三 傍線 2 を口語訳せよ。

(10点)

問四 傍線 3 は誰を指すか、記せ。

(6点)

問一 文脈から語の意味・用法を識別する。

問二 (i) 助詞・助動詞といった細部にも注意する。

問三 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える。

問五 傍線4は、誰が誰を「とぶらふ」のか。最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 作者が夫を イ 作者が時姫を ウ 夫が時姫を エ 時姫が作者を

(6点)

問六 A に最適なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア あやしく イ ゆかしく ウ ゆゆしく エ わびしく

(6点)

出典

『蜻蛉日記』上巻

『蜻蛉日記』は、平安時代、天延二(九七四)年から長徳元(九九五)年の頃に成立したと見られる、わが国最初の女流日記である。作者は右大将藤原道綱母^{みづのぼは}で、父藤原兼寧^{ともやす}は地方官生活の多かった受領ではあったが、おそらく文章生^{もんじょうしゅう}の出身であろうと言われる。また、妹は『更級日記』の作者菅原孝標女^{すがわらかたすのぶめ}の母にあたるなど、文学的家系であった。日記は三巻から成り、夫である藤原兼家とのなれそめから長男道綱の誕生、「町の小路の女」のもとへ通い始める兼家に対する作者の嘆きなどが上巻に記されている。藤原兼家は摂関家の出であり、作者の結婚には父をはじめ縁者たちが大きな期待を寄せたに違いないが、兼家にはすでに時姫という妻がいて、長男道隆も生まれていた。兼家には何人もの妻がいたが、特に時姫は、その父の地位は倫寧とほぼ同程度であったものの、生んだ子女が摂関家の後継者や入内^{いりない}して女御になるなど栄達したために、兼家からとりわけ重んぜられた。このような背景から、美貌に恵まれ、また歌人としての才能にも秀でていた作者は、当時の一夫多妻制における女性の苦悩というものを味わうこと

になる。中巻は、作者と兼家との関係がますます疎遠になり、それゆえに出家を決意したり鳴滝に参籠^{さんろう}したりする様子などが、下巻は、二人の関係はやや好転するものの、作者の心が道綱の養育にのみ傾いていく様子などが記されている。結婚後二十一年間にわたる作者の身の上の記録において、率直に自己の私生活を告白した点や陰影に富んだ克明な心理描写は、後の宮廷女房文学——『源氏物語』やこれ以後栄える平安女流日記——に大きな影響を与えた。

解答

問一 a エ b カ c イ d ウ

問二 (i) 副詞 助動詞 助動詞

さ な なり

(ii) 家の前を通っていくのは夫であるようだ、ということ。

問三 何とかしてせめて見たり聞いたりしないでもいいものだ

問四 藤原兼家(作者の夫)

問五 イ

問六 ウ

解説

今回の文章の概要

兼家の来訪が途絶え、参内の往復にも作者の家を素通りする。いたたまれない作者が、自分と同じ境遇にある時姫に同情を寄せ、歌のやりとりをする。

・宮中に参内する際に兼家が通る道の途中にある作者の家

↓兼家の車が作者の家を素通りしていることが感じられる

↓夫のことを見聞きしたくないと思うものの、うまくいかない

・正妻の時姫の元にも、兼家は通っていないらしいと知る

↓同じ境遇の時姫に同情し、便り（和歌）を送る

…夫が通ってこなくても、私は吹く風に乗せてあなたに便りを送ります

←

・時姫からの返事

…夫の心変わりを知らせる風であると思うと、その風はいまわしく感じられます

重要表現 ※太字の意味が、文中で使われている意味です。

l2寝もねられず 眠ることもできない

l5むげに [副] ①むやみに・ひどく

②（打消の語を伴って）まったく、全然

☒ 文脈から語の意味・用法を識別できたか

問一 「し」の識別問題。

a 副助詞「し」は強意を表し、係助詞「も」を伴って「しも」という形で用いられることが多い。文中から「し」を抜いても前後のつながりが文法的におかしくならないのが、副助詞「し」の特徴である。

b 接続助詞「して」は接続助詞「て」と同じ働きをする。サ行変格活用動詞「す」の連用形「し」に接続助詞「て」の付いた「して」と紛らわしいが、〈する〉という動作が内容的に含まれるかどうかで吟味すればよい。ここでは、〈夜を長くする〉ではなく、〈夜が長くて〉という意味である。また、使役の対象・手段方法・共同作業の人数などを表す格助詞「して」は、体言や連体形に付くので、ここでは不適切。

c 「ものしう」は形容詞「ものし（＝不快だ・いやだ）」の連用形「ものしく」がウ音便化したもの。したがって、シク活用の「ものし」において、「もの」は語幹、「しく」は活用語尾で「し」はその一部となる。「ものしうのみおぼゆれば」と直後の「わびしうのみおぼゆ」との対応に気づけば、「ものしう」を一語扱いする見当はつく。

d 直前に、動詞の連用形「通ひ」があり、直後は体言「道」が続いているから、「し」は連体形。この二点から助動詞と見分けられる。助動詞「き」は、連用形接続であり、「せ・〇・き・し・しか・〇」と活用する。

- ☑ 助詞・助動詞といった細部にも注意できたか
 ☑ 古典常識や古文の典型的な展開を踏まえて読めたか

問二 (一) 副詞「さ(然)」は、〈そう・そのように〉という意。「なり」は、断定の助動詞「なり」の連体形「なる」と伝聞・推定(ここでは推定)の助動詞「なり」とが接続した「なるなり」が、撥音便化して「なんなり」となり、さらに「ん」の無表記で「ななり」となったものである。

(二) まず「さ」が指す内容を明らかにしなければならない。状況は、夫が作者のもとを訪れることなく、宮中への行き帰りに作者の家の前を素通りしてしまうというもの。当時、身分の高い人は外出に牛車を用いていたが、その車のきしむ音は、部屋の中にいる作者の耳にも入ってきた。車が家の前を通っていき、さらに聞き覚えのある咳払い(せき払い)する(ℓ1・2「うちしはぶきてうち渡る」)、その音を聞いて、作者は、〈そのようだ〉つまり〈夫であるようだ〉と推量しているのである。

- ☑ 傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換えられたか

問三 まず傍線部を品詞分解すると、「いかで／見／聞か／ず／だに／あり／にしがな」となる。副詞「いかで」は、疑問・反語・願望の三つの意味を表すが、ここでは末尾に、願望を表す終助詞「にしがな」があるので、それと呼応し、〈何とかして……(したいものだ)〉という願望を表す。そして、副助詞「だに」は、ここでは最小限の希望を表す(せめて……だけでも)の意。「見聞かず」の「ず」は、打消の

助動詞「ず」の連用形。「あり」は、間に「だに」が挿入されているが内容的には「見聞かずあり」と続き、〃見たり聞いたりしないという状態を表す、補助動詞として用いられる。作者のもとを訪れることのない夫に関することは、見たり、聞いたりしたくない、と思っているのである。

- ☑ 前後の文脈を踏まえて傍線部を解釈できたか

問四 「すきごと(好き事)」は〈色好みの行い・恋愛沙汰^{ざた}〉の意。「せし」はサ行変格活用動詞「す」の未然形に過去の助動詞「き」の連体形が接続したもの。傍線部に続く「いまはおはせず(＝今はいらっしやらない)」から、同一人物の「むかし」と、別人のようになった「いま」の様子が対比的に述べられていることがわかり、ここでの「すきごと」は、「おはせず」をヒントに、〈浮名をあげて作者のもとに通うこと〉と解釈できる。そのような動作の主は、言うまでもなく作者の夫(＝藤原兼家、「注」参照)である。なお、『蜻蛉日記』の作者の夫が藤原兼家であることは、知識として頭に入れておくこと。

- ☑ 文脈や敬語から動作主・動作の受け手を押さえられたか

問五 「とぶらふ」の主語は、文脈から、直前にある「あはれ、ましていかばかりと思」った人である。「あはれ、ましていかばかり(＝ああ、ましてどれほど)」という思いは、さらにその直前にある「むげに絶えぬと聞」いた結果の心情で、「聞く」「思ふ」「とぶらふ」という一連の動作の主は、作者である。日記の場合、動詞に尊敬語が用いられず、しかも主語が明らかにされていないならば、その多くは日記

の作者が主語である。なお、「とぶらふ（訪ふ）」は、ここでは〈心配して様子を聞く・見舞う〉の意で、実際には手紙を送ったことを表している。作者は、夫が時姫のもとへも通わなくなってしまったことを聞き（ℓ5「子どもあまたありと……」）、自分以上に時姫がどれほど思い悩んでいることかと思いやったのである。作者が手紙を送った相手は時姫である。したがって正解はイ。

☑ 和歌の詠み手と受け手を意識し、前後の文脈や修辞知識を使って内容を把握できたか

問六 「色変はる……」は時姫の歌。「吹く風に……」という作者の歌に対する返歌である。作者が時姫に送った歌の大意は、〈たとえ夫が通ってこなくても、私は吹く風にことづけてでもあなたにお便りしましょう〉というもの。「吹く風につけてもとはむ」が作者の最も伝えたい思いであり、時姫の歌の「つけてとふ風」はそれを受けている。その「風」が、時姫にはどのように感じられるのか、というのがここで問われていることである。「色変はる心と見れば」という条件句から、この「風」は、草木の色が変わる秋の風であると同時に、心が変わる夫をも意味していると言えるだろう。時姫にとって、夫の心が他の女に移り、自分のもとへの訪れが絶えてしまったという事態は、いまわしい、不愉快なことである。したがって正解はウ。「ゆゆしく」は、〈いまわしい・ひどい〉という意を表す形容詞「ゆゆし」の連用形。

なお、ア「あやし」は〈不思議だ〉、イ「ゆかし」は〈心ひかれる気持ちだ〉、エ「わびし」は〈さびしい〉、というのが主な意味。「わびし」には、他にも〈つらく苦しい・せつない・心細い〉といった意

味があるので、ウとエで迷った人も多いと思うが、作者も夫の訪れが途絶えていることを人々に噂されてℓ4「ものしう（＝不快だ・気に食わない）」と感じていることから、同じ境遇である時姫も同様であらうと想像できる。よって、不快感があらわにされているウの方が適切である。

全訳

こうして、（あの人の訪れが）途絶えている頃、私の家は（あの人が）宮中に参内したり退出したりする道の途中にあるので、夜中となく曉となく、咳払いをしながら通っていくのを、聞くまいと思っても、（耳については）くつろいで眠ることもできず、「夜長うして眠ることなし」という詩句のようで、¹家の前を通っていくのはあの人であるようだと²思っ³て見聞く気持ちは、何にたとえようもない。今は²何とかして⁴せめて（あの人のことを）見たり聞いたりしない⁵でいたいものだと思⁶うのに、「かつては³浮名をあげて通っていた人も、今ではいらっしやらないとか」などと、あの人の関心を抱いて（人々が）陰口をたくさんを聞くにつけ、不快に思われるので、日暮れどきはせつないとはかり思われる。

子どもが大勢いると聞く人の所も、（あの人の訪れは）すっかり絶えてしまったと耳にする。ああ、私以上にどれほど（つらいことだらう）と思っ⁷て、⁴見舞いの手紙を送る。九月頃のことであった。しみじみとした思いなどを、たくさん書いて、

吹く風に……（吹く風にことづけて（私はあなたに）お便りを差し上げましょう。夫の訪れを知らせるとい⁸う蜘蛛がおとってくる

道が空に絶えても（あの人が、あなた様の所にも私の所にもまったく訪れなくなってしまったとしても）

返事は、心こまやかに（書いてあつて）、

色変はる……〈風にことづけてお便りをくださるということですが、草木の色が変わる秋の風、つまり夫の心変わりを表す風だと思ふと、その風は

A **いまわしく** 思われることですわ〉

と（歌が）添えてある。

まとめ

- ・文脈から語の意味・用法を識別する
- ・助詞・助動詞といった細部にも注意する
- ・古典常識や古文の典型的な展開を踏まえて読む
- ・傍線部を品詞分解し、過不足なく現代語に置き換える
- ・前後の文脈を踏まえて傍線部を解釈する
- ・文脈や敬語から動作主・動作の受け手を押さえる
- ・和歌の詠み手と受け手を意識し、前後の文脈や修辞知識を使って内容を把握する